

看護学生の自己意識・ 自己評価と共感性の関連

遠藤 順子¹⁾・菅原 真優美²⁾

立川市立看護専門学校 新潟青陵大学看護学科

Self-consciousness, Self-evaluation and Empathy in Nursing Students

Junko Endo¹⁾ ・ Mayumi Sugawara²⁾

1) TACHIKAWA MUNICIPAL NURSING SCHOOL

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

The purpose of this study is to find the characters of self-consciousness and self-evaluation of nursing students, and to investigate the relation between these characters and the empathy that is one of main nursing elements.

We executed questionnaire composed of 'Self-Esteem-Scale', 'Self-consciousness scale', 'Scale of motivation for acquiring praise or motivation for avoiding rejection' and 'Emotional Empathy Scale' at nursing college in Tokyo (the third grade 905 students). As a result, we found that there is no relation between 'Self-Esteem-Scale' and 'Emotional Warmth'. And, there is a correlation between 'public self-consciousness', and 'motivation for acquiring praise', 'motivation for avoiding rejection'. Students having high 'public self-consciousness' are strongly effected by 'emotional-warmth'. Under these results considered, we discussed educational efforts of nursing educators for nursing students

Key words

nursing students, empathy, self-consciousness, self-evaluation

要 旨

本研究は、看護学生の自己評価・自己意識について調査し、それらの特徴と看護の主な要素のひとつである共感との関連を明らかにすることを目的とした。調査は、東京都内の看護専門学校（3年課程）の看護学生905名を対象に、(1)「自尊感情尺度（Self-Esteem Scale）」(2)「自己意識特性尺度（self-consciousness Scale）」(3)「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」(4)「情動的共感性尺度（EES; Emotional Empathy Scale）」から構成される質問紙を実施した。

主要な結果は、(1)「自尊感情」と「感情的暖かさ」との間には相関関係は認められなかった。(2)「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」との間には正の相関関係が認められた。3.「公的自己意識」が高い者ほど「感情的暖かさ」に強く影響していた。

これらの結果から、看護学生に対する看護教員の教育的働きかけについて考察した。

キーワード

看護学生, 共感, 自己意識, 自己評価

はじめに

看護においてひとりの人がひとりの人に関わる時、「相手の身になって感ずる能力、他のひとの必要なものを直感的に把握すること」¹⁾が不可欠である。これは、看護の独自の機能であり、看護の主要な要素の一つである共感である。また、他者受容は自己受容から始まると言われている。他者を受け入れ理解するためには、まず自分が自分自身を受け入れ、理解することが必要となる。

共感に関する主な先行研究には、角田(1993)の作成した共感経験尺度改訂版(The Empathic Experience Scale Revised:EESR)と別の尺度を組み合わせた尺度を用いた白石(1996)による報告がある。これによると看護学生と教育系学生における共感性の比較をした場合「看護学生が教育系学生に比べ共感性が低い」²⁾という結果であった。

また、自己を理解していくうえで大切な要素となる自己意識とは、意識や注意が自己に向かっている状態のことをいい、これは「対象としての自己および自己の行動に関する知覚や、それに対する態度・感情・評価」³⁾を意味し、他者の理解に大きな影響を持つと言われている。押見(1980)は、「私的自己意識の高い人は、単純な情動事態ではその注意の焦点が自己の覚醒状態となり、そのため、覚醒水準の変化が顕在し、知覚された感情覚醒が大きくなる」⁴⁾と述べている。要するに、自己意識の高い人は、そうでない人に比べて自分の感情を敏感に感じ取ることが出来ると考えられている。

そして、自己を評価し自己受容の指標となるものとしては「自尊感情」(self-esteem)が挙げられる。この自尊感情に関する主な先行研究では、本研究と同尺度を用いた清水(1999)によると、自尊感情と援助行動経験においては「高自尊感情の方が低自尊感情者よりも援助行動が多い傾向があった」⁵⁾ことを報告している。

また、共感性と関連因子についての先行研究には、林(2002)による共感と自尊感情、社会的スキル、職業志向性との関連を検討した結果、「社会的スキルが高ければ共感性も

高い」⁶⁾そして「『人間関係志向が高ければ共感性も高い』」⁷⁾という結果がある。

以上のように、「共感」「自己意識」「自己評価」のそれぞれについての研究は多々なされており、すでにさまざまな結果を得ている。また、看護が人間を対象とし、対人関係のうえで成り立つものであることから、対象理解の必要性や、それに不可欠とされる共感や受容に関しても今になって問題とされているわけではない。しかし、いくら医療技術が専門化、高度化しても結局それは人間の手を介して対象へと伝わるのであって、より良い看護を提供するために看護をおこなう者の人間性が問われ続けることもまた事実なのである。次代を担う看護学生はまさに現在を生きており、こうした看護学生一人ひとりの個別性に対応して援助、指導していくためにも、まず現在の看護学生が自分たちをどのように意識し、評価しているのか、そのありのままの全体的な傾向を捉えることにも意味があるのではないかと考えた。加えて、「看護ケアの質は看護する者の質に左右される」と言われるように、看護においてはその行為者である看護者自らの自己に対する評価や意識が問題となるが、看護学生の共感と自己意識・自己評価との関係を検討された報告はない。

以上から本研究では、看護学生の自己評価・自己意識の特徴を知るとともに、看護の主要な要素の一つであり対象を理解するうえで重要な共感と看護学生の自己評価・自己意識との関連を明らかにしていく。また、それらから看護学生の適切な自己評価を促し共感を高める教育的な関わりについて考察していく。

調査目的

本研究は看護学生の自己評価・自己意識について調査し、それらの特徴と看護の主要要素である共感との関連を明らかにする。また、看護学生の適切な自己評価や看護の対象に対する共感を促す看護教員の教育的働きかけについて考察することを目的とする。

・調査方法

1. 調査期間および被験者

2000年6月から7月に、東京都内の看護専門学校（3年課程）6校の看護学生905名（1年生360名（39.8%）、2年生334名（36.9%）、3年生211名（23.3%）、男性62名（6.9%）、女性843名（93.1%））、平均年齢=20.66歳（年齢最小値18、年齢最大値48、標準偏差（以下SDと略す）3.41）を被験者に行われた。

2. 調査の手続き

各学校の責任者に調査依頼をおこない、許可が得られた学校に対し、直接または各学校の教員による学生への調査協力の説明、調査表の配布、回収を行なった。集団調査による場合と一部先に調査表を配布し所定の場所に回収袋を設けて回収する場合とがあった。

3. 回収状況

1209部を配布し1071部の回答があった。回収率は88.9%であった。このうち有効回答は905部、有効回答率84.1%であった。

4. 質問紙構成

使用した質問紙（添付資料）は無記名とし性別、学年の基本的属性に関する質問の他に、次の5つの尺度から成る74項目により構成されている。各尺度の反応形式は“あてはまる”（5点）“ややあてはまる”（4点）“どちらともいえない”（3点）“ややあてはまらない”（2点）“あてはまらない”（1点）の5件法である。

(1)「自尊感情尺度（Self-Esteem Scale）」⁸⁾：本尺度は、ローゼンバーグ（Rosenberg, 1965）が作成し山本ほか（1982）が邦訳したものである。質問紙（添付資料）の間4（1）～（10）に示すように自己への感情的評価の測定尺度で10項目から成る。反応形式は上述の通りであるが、問4（3）（5）（8）（9）（10）は逆転項目である。合計得点は10点から50点の範囲に分布する。

(2)「自己意識特性尺度（self-consciousness Scale）」⁹⁾：フェニグスタイン（Fenigstein, A）ほか⁹⁾が作成したものを押見らが邦訳した日本

語版である。これは、自分に注意を向け、自分を意識しやすい性格を測定するものである。「私的自己意識尺度」「公的自己意識尺度」「対人不安尺度」の3つの下位尺度から成る。「私的自己意識尺度」は、質問紙（添付資料）の間5（12）（13）（15）（23）（25）（27）（33）（37）（39）に示すように自分の感情や態度や考えていることなどの内的で、他人には直接知ることの出来ないような私的側面に注意を向けやすい傾向を測定する9項目から成る。このうち問5（25）（37）は逆転項目である。合計得点は9点から45点に分布する。「公的自己意識尺度」は、質問紙（添付資料）の間5（14）（16）（17）（22）（24）（26）（32）（34）（38）に示すように他人から見られている自分を意識しやすい傾向を測定する9項目から成る。合計得点は9点から45点に分布する。「対人不安尺度」は、質問紙（添付資料）の間5（10）（19）（21）（28）（29）（35）（36）に示すように他人がいる場面で精神的に動揺しやすい傾向を測定する7項目から成る。このうち問5（21）は逆転項目である。合計得点は7点から35点に分布する。また、本研究では「対人不安尺度」の「人に見られていると仕事がうまくできなくなる」という原尺度の項目を調査対象が看護学生であることを考慮して「人に見られていると学習や実習がうまくできなくなる」と一部変更して用いた。

(3)「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」¹⁰⁾：本尺度は、菅原（1986）が作成したものである。他者から承認を受けたいという意識を2側面に分けて測定する尺度である。質問紙（添付資料）の間5（1）（2）（3）（4）（5）に示すように「賞賛獲得欲求尺度」5項目と、質問紙（添付資料）の間5（6）（7）（8）（9）に示すように「拒否回避欲求尺度」4項目から成る。合計得点は「拒否回避欲求尺度」は5点から25点に、「拒否回避欲求尺度」は4点から20点に分布する。

(4)「情動的共感性尺度（EES；Emotional Empathy Scale）」¹¹⁾：本尺度は、メラビアン（Mehrabian）とエプステイン（Epstein, 1972）に基づいて加藤・高木（1980）が作成したもので、他者の気持ちに共感する程度を測定する尺度である。下位尺度の「感情的暖かさ尺

度」は、質問紙（添付資料）の問6（1）（6）（8）（11）（13）（17）（18）（20）（22）（25）に示す10項目である。合計得点は10点から50点に分布する。また、下位尺度の「感情的冷たさ尺度」は、質問紙（添付資料）の問6（3）（4）（7）（9）（12）（14）（15）（16）（21）（23）に示す10項目である。合計得点は10点から50点に分布する。そして、「感情的被影響性尺度」は、質問紙（添付資料）の問6（2）（5）（10）（19）（24）に示す5項目である。このうち、問6（10）（24）は逆転項目である。合計得点は5点から25点に分布する。これらの尺度は原尺度では7件法の反応形式をとっているが、本研究では他の尺度に準じて5件にして用いた。

5. 分析方法

エス・ピー・エス・エス社の統計解析ソフトSPSS Base 10.0Jを用いた。「感情的暖かさ」と「自尊感情」の関係、「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」の関係については相関分析、回帰分析、一元配置分散分析をおこなった。「感情的暖かさ」と「公的自己意識」の関係、「自尊感情」「感情的暖かさ」「私的自己意識」「公的自己意識」の各尺度得点の男女の比較については一元配置分散分析をおこなった。

・結果

1. 各尺度の平均得点および標準偏差

各尺度の得点平均および標準偏差は表1に示す通りである（表1）。

2. 「自尊感情」と「感情的暖かさ」との関連

「自尊感情」と「情動的暖かさ」との相関分析をおこなった結果、2つの変数間には優位な相関関係はみられなかった。（ $r = .053$, $p > .05$ ）また、「自尊感情」をはじめとする自己評価や自己意識がどの程度共感性に影響しているのかを調べるため、「感情的暖かさ」を従属変数、「自尊感情」「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」「私的自己意識」「公的自己意識」「対人不安」「感情的冷淡さ」「感情的冷淡さ」を独立変数としてステップワイズ回帰分析をおこなった。その結果、優意差5%水準で、表2に示すように「感情的暖かさ」に影響すると予測される要因として「感情的冷淡さ」= $-.372$ 、「公的自己意識」= $.094$ 、「私的自己意識」= $.165$ 、「賞賛獲得欲求」= $.155$ が示唆された（表2）。しかし、これらの重相関係数（ R ）は $.505$ 、決定係数（ R^2 ）は $.255$ であり、これら4つの変数でも「感情的暖かさ」に影響する原因をほぼ25%説明しているのみである。また、以上の結果から「自尊感情」は「感情的暖かさ」に影響する要因としてはあてはまらなかった。

さらに「自尊感情」の程度による「感情的

表1 各尺度の平均値と標準偏差(最小値・最大値)

	N	M	SD	MIX	MAX
自尊感情尺度	905	31.50	6.75	11	50
賞賛獲得欲求尺度	905	16.41	4.51	5	25
拒否回避欲求尺度	905	13.85	3.76	4	20
私的自己意識尺度	905	32.15	5.62	14	45
公的自己意識尺度	905	32.69	5.53	9	45
対人不安尺度	905	22.29	5.28	7	35
感情的暖かさ尺度	905	40.13	5.29	17	50
感情的冷淡さ尺度	905	21.73	5.69	10	45
感情的被影響性尺度	905	17.13	3.32	7	25

N=人数 M=平均値 SD=標準偏差 MIX=最小値 MAX=最大値

表2 「感情的暖かさ」を従属変数とし、他の尺度を独立変数とした回帰分析の結果

Variable	B	SD B	Beta	T	Sig T
感情的冷淡さ	-.364	.027	-.372	-12.836	.000
公的自己意識	8.984E-02	.033	.094	2.709	.007
私的自己意識	.156	.029	.165	5.314	.000
賞賛獲得欲求	.182	.038	.155	4.778	.000
(定数)	36.732	1.323		27.772	.000

Variable=変数, B=回帰係数, SD B=標準誤差, Beta=標準化係数, T=t値, Sig T=有意確率

表3 「公的自己意識」を従属変数とし、他の尺度を独立変数とした回帰分析の結果

Variable	B	SD B	Beta	T	Sig T
拒否回避欲求	.448	.041	.305	10.976	.000
私的自己意識	.281	.023	.286	12.204	.000
賞賛獲得欲求	.327	.031	.267	10.446	.000
対人不安	.188	.027	.179	6.966	.000
感情的被影響性	.231	.044	.138	5.235	.000
(定数)	3.942	1.048		3.760	.000

Variable=変数, B=回帰係数, SD B=標準誤差, Beta=標準化係数, T=t値, Sig T=有意確率

暖かさ」への関係を調べた。これは、「自尊感情」の上位約25%を自尊感情高群(人数(以下Nと略す)=250, M=40.49, SD=5.56), 下位約25%を自尊感情低群(N=210, M=40.22, SD=5.13), その他を自尊感情中間群(N=445, M=39.89, SD=5.15)に分けて各群の間に差があるかどうかを明らかにするために一元配置の分散分析をおこなった。その結果、「感情的暖かさ」に影響する自尊感情高群, 自尊感情中間群, 自尊感情低群の間には有意な差は認められなかった($F(2,902)=1.068, p>.05$)。この結果から「自尊感情」は、その程度によっても「感情的暖かさ」には何ら影響を及ぼさないことが明らかになった。

3. 「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」との関連

「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」との相関分析をおこなった結果、「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」の2つの変数の間には中程度の有意な正の相関関係がみられた($r=.451, p<.01$)。また「公的自己意識」と「拒否回避欲求」の2つの変数の間にも中程度の有意な正の相関関係がみられた($r=.551, p<.01$)。このため、「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」がどの程度「公的自己意識」に影響を与えているかを調べる

ため「公的自己意識」を従属変数、「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」をはじめとするその他の尺度を独立変数としたステップワイズ回帰分析をおこなった。その結果、有意差5%水準で表3に示すように「公的自己意識」に影響していると予測される変数として「拒否回避欲求」「私的自己意識」「賞賛獲得欲求」「対人不安」「情動的被影響性」の5つの要因が示唆された。標準変回帰係数(ベータ)をみると「拒否回避欲求」=.305, 「賞賛獲得欲求」=.267で「公的自己意識」に対しては拒否回避欲求の方が強く影響を与えている。そして、「拒否回避欲求」「賞賛獲得欲求」の2つの要因で他の3つの要因とほぼ同程度の影響力があり(表3), これら5つの要因の重相関係数(R)は.717, 決定係数(R^2)は.514であった。そして、図1に示すように「公的自己意識」に「拒否回避欲求」および「賞賛獲得欲求」は正の関係で影響していることを示す(図1)。

さらに、「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」の程度による「公的自己意識」への影響を調べた。これは、「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」の各得点の上位約25%の群, 下位約25%の群, その他の群に分けて「賞賛獲得欲求」を賞賛獲得欲求高群(N=470, M=34.71, SD=5.00), 賞賛獲得欲求低群

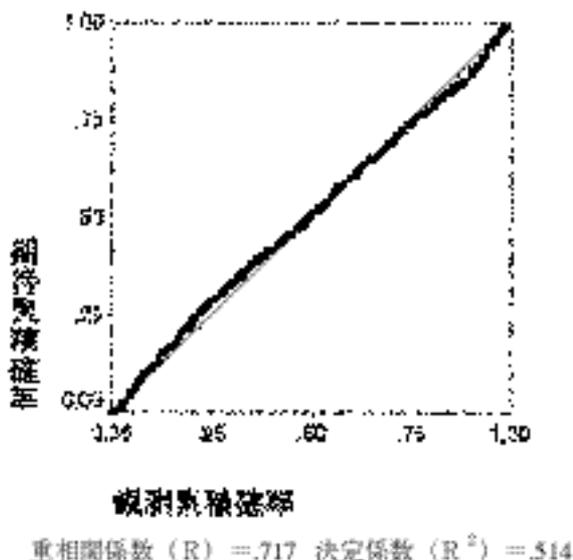


図1 「公的自己意識」と「拒否回避欲求」「私的自己意識」「賞賛獲得欲求」「対人不安」「感情的被影響性」との回帰の確立プロット

($N=133$, $M=28.51$, $SD=5.57$), 賞賛獲得欲求中間群 ($N=302$, $M=31.38$, $SD=4.85$) に分け, また, 「拒否回避欲求」を拒否回避欲求高群 ($N=225$, $M=36.42$, $SD=4.23$), 拒否回避欲求低群 ($N=201$, $M=28.73$, $SD=5.89$), 拒否回避欲求中間群 ($N=479$, $M=32.60$, $SD=4.66$) に分けて, それぞれの群が「公的自己意識」にどのように影響するかを比較するため一元配置の分散分析をおこなった。その結果, 「公的自己意識」に影響する「賞賛獲得欲求」の程度の差は有意であった ($F(2,902) = 93.714$, $p < .01$)。このため, いずれの群に有意差があるのかを明らかにするためにLeveneの等分散性の結果, 有意差がなかった ($F(2,902) = 1.988$, $p > .05$) ため多重比較ではBonferroniを用いた。その結果, 表4に示すように各群の間に5%水準で有意差が見いだされた。また, 各群間の平均値の差は賞賛獲得欲求高群と賞賛獲得欲求低群間, 賞賛獲得欲求高群と賞賛獲得欲求中間群間, 賞賛獲得欲求中間群と賞賛獲得欲求低群間の順に大きかった (表4)。

一方, 「公的自己意識」に影響する「拒否回避欲求」の程度の差も有意であった ($F(2,902) = 132.841$, $p < .01$)。このため, いずれの群に有意差があるのかを明らかにするためにLeveneの等分散性の結果, 有意差があった ($F(2,902) = 10.859$, $p < .01$) ため多重比較では

Dunnett T3を用いた。その結果, 表5に示すように各群の間に5%水準で有意差が見いだされた。また, 各群間の平均値の差は拒否回避欲求高群と拒否回避欲求低群間, 拒否回避欲求中間群と拒否回避欲求低群間, 拒否回避欲求高群と拒否回避欲求低群間の順に大きかった (表5)。

4. 「公的自己意識」と「感情的暖かさ」の関連

「公的自己意識」と「感情的暖かさ」の間には正の相関が認められた ($r = .256$, $p < .01$)。

5. 「情動的暖かさ」に影響する「公的自己意識」の程度の差の比較

「公的自己意識」の程度による「情動的暖かさ」への関係を調べた。これは, 「公的自己意識」得点の上位約25%を公的自己意識高群 ($N=222$, $M=42.20$, $SD=4.92$), 下位約25%を公的自己意識低群 ($N=243$, $M=38.26$, $SD=5.94$), その他を公的自己意識中間群 ($N=440$, $M=40.12$, $SD=4.69$) に分けて各群の間に差があるかどうかを明らかにするために一元配置の分散分析をおこなった。その結果, 「感情的暖かさ」に影響する公的自己意識高群, 公的自己意識中間群, 公的自己意識低群の間には有意な差があった ($F(2,902) = 34.569$, p

表4 「公的自己意識」に関する賞賛獲得欲求高群、賞賛獲得欲求低群、賞賛獲得欲求中間群の3群による多重比較 (Bonferroni) の結果

(I) 賞賛獲得欲求高中低群	(J) 賞賛獲得欲求高中低群	平均値の差 (I-J)	標準誤差
賞賛獲得欲求高群	賞賛獲得欲求低群	6.20*	.49
	賞賛獲得欲求中間群	3.33*	.37
賞賛獲得欲求低群	賞賛獲得欲求高群	-6.20*	.49
	賞賛獲得欲求中間群	-2.87*	.52
賞賛獲得欲求中間群	賞賛獲得欲求高群	-3.33*	.37
	賞賛獲得欲求低群	2.87*	.52

* 平均の差は.05で有意

表5 「公的自己意識」に関する拒否回避欲求高群、拒否回避欲求低群、拒否回避欲求中間群の3群による多重比較 (Dunnett T3) の結果

(I) 拒否回避欲求高中低群	(J) 拒否回避欲求高中低群	平均値の差 (I-J)	標準誤差
拒否回避欲求高群	拒否回避欲求低群	7.69*	.47
	拒否回避欲求中間群	3.82*	.38
拒否回避欲求低群	拒否回避欲求高群	-7.69*	.47
	拒否回避欲求中間群	-3.87*	.41
拒否回避欲求中間群	拒否回避欲求高群	-3.82*	.39
	拒否回避欲求低群	3.37*	.41

* 平均の差は.05で有意

表6 「感情的暖かさ」に関する公的自己意識高群、公的自己意識低群、公的自己意識中間群の3群による多重比較 (Dunnett T3) の結果

(I) 公的自己意識高中低群	(J) 公的自己意識高中低群	平均値の差 (I-J)	標準誤差
公的自己意識高群	公的自己意識低群	3.94*	.47
	公的自己意識中間群	2.08*	.42
公的自己意識低群	公的自己意識高群	-3.94*	.47
	公的自己意識中間群	-1.86*	.41
公的自己意識中間群	公的自己意識高群	-2.08*	.42
	公的自己意識低群	1.86*	.41

* 平均の差は.05で有意

<.01)。このため、いずれの群に有意差があるのかを明らかにするためにLeveneの等分散性の結果、有意差があった ($F(2,902) = 7.102, p < 0.1$) ため多重比較ではDunnett T3を用いた。その結果、表6に示すように各群の間に5%水準で有意差が見い出された。また、各群間の平均値の差は、公的自己意識高群と公的自己意識低群間、公的自己意識高群と公的自己意識中間群間、公的自己意識中間群と公的自己意識低群間の順で高かった(表6)。

6. 「公的自己意識」の男女による比較

「公的自己意識」についての性差を見るため男子 ($N = 62, M = 30.32, SD = 6.50$) と女子 ($N = 843, M = 32.86, SD = 5.42$) との一元配置の分散分析をおこなった結果、有意差が認められた ($F(1,903) = 12.326, p < .01$)。

7. 「自尊感情」の男女による比較

「自尊感情」についての性差を調べるため男子 ($N = 62, M = 33.35, SD = 7.38$) と女子 ($N = 843, M = 31.36, SD = 6.69$) との一元配

置の分散分析をおこなった結果、有意差が認められた ($F(1,903) = .5.060, p < .05$)

8. 「感情的暖かさ」の男女による比較

「感情的暖かさ」についての性差を調べるため男子 ($N = 62, M = 39.58, SD = 6.04$) と女子 ($N = 843, M = 40.17, SD = 5.24$) の間に一元配置の分散分析をおこなった結果、有意な差は認められなかった ($F(1,903) = .717, p > .05$)

・考 察

看護が人間対人間の間でおこなわれる相互的な営みである以上、単に身体にのみ目を向けるのではなく、精神、情緒、感情といったものを含めて見ていく必要がある。本研究では看護の主要な要素の一つである共感に着目し、他者に共感するということが影響を及ぼすと考えた自己評価、自己意識との関係から「感情的暖かさ」と「自尊感情」、「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」、「感情的暖かさ」と「公的自己意識」の関係を中心に考察していく。

まず、第1に「自尊感情」と「感情的暖かさ」の関係について考察する。この「自尊感情」と「感情的暖かさ」の間には、結果から明らかになったように関係性は認められなかった。これは、「自尊感情の高さが人の中に実際にある優れた何かの現れであることを示す証拠はない¹²⁾」ことを支持した。しかし、マズロー (Maslow, A.H.) は、その著『改訂版人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』のなかで人間には欲求がありそれは5つの階層からなると述べている。つまり、第1に食欲や睡眠などの生理的欲求があり、第2に不安や恐怖からの回避といった安全の欲求があり、第3に社会や家族における地位を求めるといった所属と愛の欲求があり、第4に自己に対する高い評価や可能性を求める承認と自尊の欲求があり、これらがほぼ満たされるとその人がその人らしく生きるために自分の能力や可能性を求める成長欲求を持つという。このように「自尊感情」は人間が基本的に持つ重要な欲求である。また、「自分へ

の気づきと自己受容は、ともに、自分自身の経験や特性などをどの程度意識に受け入れているか、言いかえれば、自分自身に関してどの程度まで正確に完全な認識をもっているか、に関わる¹³⁾ものである。つまり、適切に自己をありのままに受け入れ、理解することが問題なのであって、単に「自尊感情」が高い低いということが、そのままその善し悪しには結びつかない。何故なら、先行研究では例えばメラビアン (Mehrabian, A) とエプSTEIN (Epstein, E., 1972) による「情動的共感性の高い人ほど援助行動をする¹⁴⁾」といった報告があるように共感性と向社会的行動のような望ましいとされる対人態度との関係が示唆されている。これを、上述した清水 (1999) の自尊感情の高い者は援助行動をとる傾向があるといった研究結果と合わせて考えると「自尊感情」と共感性の関係が全くないとは言いきれないと考える。

また、本研究結果からいえば、「感情的暖かさ」については10点から50点の得点範囲のうち約90%の被験者がその平均の25点以上を得点しており、しかも、その平均点は40点であった。このように非常に高い得点を「感情的暖かさ」自体が持っているため、それと関係する他の要因の高低といった影響については差が生じにくい結果となったと考える。また、このように看護学生の「感情的暖かさ」が高得点であったことを裏付ける研究報告もいくつかある。まず、山本ら (1982) による自己認知の各側面と自己評価との関連を明らかにしたものがある。それは、自己認知の側面の内容を11因子抽出し、これを独立変数として本研究でも使用したローゼンバーグ (Rosenberg, M) の自尊感情得点を従属変数とした回帰分析をおこなったものである。この結果、大学生の自尊感情には自己の内面的側面、外面的側面、対人的側面が重要であること。そして、自己評価と強く関係しているものとして「“優しさ”が対人的側面と対応する¹⁵⁾」ということが明らかにされている。山本ら (1982) の研究では大学生が被験者となっているが、本研究結果により自分で自分を感情的に暖かいとする結果が高く出たことは、自己を意識する時に対人的側面では優しさを

重要視しているということを看護学生においても支持したといえる。また、本研究の被験者はそのほとんどが青年期であることから服部（1998）が言うように現代日本の青年の特徴の1つである「良い子」「優しい子」が多いということを裏付けたことにもなるであろう。

第2に「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」について考察する。結果から明らかになったように、看護学生の「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」の間には相関が認められた（「公的自己意識」と「賞賛獲得欲求」との相関は $r=.451, p<.01$ 、「公的自己意識」と「拒否回避欲求」との相関は $r=.551, p<.01$ ）。そして、回帰分析の結果からも「公的自己意識」には「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」が強く影響しており、「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」ともにその得点の高いものほど強く関係していることが分かった。これは、菅原（1986）による「賞賛獲得欲求」および「拒否回避欲求」の「両欲求とも公的自己意識と0.4 - 0.6程度の正の相関を持っている、公的自己意識の強い人は一般に賞賛されたい欲求も拒否されたくない欲求も強い」といった文系、理系の大学生を被験者とした先行研究結果を支持した。まず、「公的自己意識」について考えてみる。これは、学生は評価される立場であるということは周知のことである。しかし、看護学生の場合は特に学習の場を臨地実習とした時に、何らかの意味で自分を評価する対象が受け持ち患者とその家族、臨床指導者をはじめとする病院の医療従事者、そして、教員といったように多数に、そして複雑になる。こういった状況では教員らが意識する、意識しないに関わらず、多くの眼差しが看護学生に向けられていることには変わりはない。このため、看護学生は、自分を意識しやすくなり「公的自己意識」が高いと予測をした。その結果は、本研究の被験者の看護学生においては「公的自己意識」得点は9点から45点に得点分布するが、 $M = 32.69$, $SD = 5.53$ であった。これは、先行研究の結果とほぼ同じ値である。また、このうち38点以上の高得点を示すものは全体の被験者の20%

であり、これは、5人に1人の割合を示した。「公的自己意識については、他者からの評価的フィードバックに敏感である¹⁷⁾」と言われており、実際の教育場面を振り返ると実習グループの5～6人のなかには評価を強く気にする学生は確かに存在している。これについて服部（1998）は、自己意識、対人感情の発達が未熟なため青年期にある看護学生は、他者との関わりや接点の中で自己意識を見つめていくのだと言っている。このことが「公的自己意識」の高まりの根底にあると考える。

また、誉められたいが、注意など何か言われるのは嫌いといった特徴も実際の教育場面では多々見られる。これについては、青年心理の特徴である他者から理解されたい欲求が他のどの発達段階よりも強いことや、「自己中心性」と「感情の易変性と両価性¹⁸⁾」を持つことから考えられるであろう。青年期にある者は自己中心的であるばかりでなく独断的で、他者の意見や助言を修正して聞き入れることがなかなか出来ない。さらに「反応量が大きいのに反し、統制能力はまだ未熟¹⁹⁾」ため誉められたい反面、否定されることを強く拒むのである。こうしたことは、青年期そのものの発達課題がアイデンティティの確立であることから「自己の能力を客観的に評価できず、理想と現実との「ズレ」の認知が正確にできない²⁰⁾」ことによる不安がこの時期の根底あるからだといえる。これらは、「拒否回避欲求」や「賞賛獲得欲求」といった特徴を看護学生が持っていることを説明している。

そして、こうした特徴を持ちながらも「自分を知るうえで、また他人を理解するうえで重要となる情報は、単に自分を意識しやすい性格であるかどうかではなく²¹⁾」私的自己意識の高さや公的自己意識の高さであると言われており、このことは、自尊感情と同じくやはりいかに適切に自己を見つめ、受け入れることが出来るかが大切であることを示唆している。

第3に、「感情的暖かさ」に影響する「公的自己意識」の程度について考察する。予測では、共感自己に対する肯定的な評価やいかに自己を内省出来るか、といったことに関係することを前提として、看護学生は「感情

的暖かさ」が高い者でも常に評価される立場であるため、「感情的暖かさ」に影響する「公的自己意識」の程度の差はないと考えた。しかし、結果は「公的自己意識」が高い者の方がより「感情的暖かさ」に関係するというものであった。これは、先に述べたように看護学生は評価される対象であり、また、自己を客観的に評価出来ないことによる不安を持つため、「他者志向性の強い人であるなら、他の人からどのように見られているかが最も大きな関心事²²⁾」となるのは当然である。つまり、看護の対象である受け持ち患者、臨床指導者、そして看護教員などからの否定的な評価には敏感な反面、そのこと自体に対する自己への内省の弱さを持っていることがあげられる。また、自分を評価する時に「女子の場合の自己評価的意識は(中略)周囲の目によって大きく左右されるもの²³⁾」であると言われている。これに対し、男子の場合は「自分なりに自分を見ていく²⁴⁾」ことで自己評価的な意識と関わると言われている。これは、本研究結果においても女子の方が男子よりも「公的自己意識」が高いことが有意に認められたことを裏付けている。

以上の結果から、看護学生の適切な自己評価と他者への共感を促すための看護教員の教育的働きかけについて考えていく。まず第1に、「学生は人びとに共感する能力をさまざまな程度に所有している²⁵⁾」という考えを前提に学生に関わるということである。何故なら、本研究結果を通して明らかになったのは、そのほとんどが青年期にある看護学生の共感性が高いということである。もちろん、それは個人差がある。しかし、例え自分を適切に評価することが出来ず、そのことが対象理解を遅らせ、延いては看護への妨げとなることがあったとしても、多くの看護学生は、時には自己の感情のコントロールを危ぶみながらも、出来る限り対象に対して誠実に優しく接しているのではないだろうか。看護学生に対象に対する共感を求めるのならば、その前に看護教員が看護学生に共感していくことが必要になるであろう。教員はかつて自分が学生だったことから、現在の時代を生きる学生を理解したような気持ちになっている。しかし、

そこには長い時間の経過があり、決して同じでないということをより意識して関わる必要があると考える。

第2に、学生の出来ないことに目を向け、原因探しをするのではなく、出来ていることに焦点を合わせて関わるということである。上述したように、本研究結果からも青年期の心理的特徴からも、「公的自己意識」が強く、人から認められたいが、その反面で否定されることは嫌う看護学生に対しては、いくら出来ない原因を探しても根本的な解決には至り難い。仮に原因が見つかったとしても、今以上に「私はこれも出来なかった」という自己に対するマイナスのイメージをいたずらに増やす場合が多いのではないだろうか。また、自分の否定的な面に目を向けることが弱い看護学生が、自己の否定的な側面と対峙し、建設的な考えや行動に至るということは経験上、稀である。指導において、出来ないことだけに目を向けた原因探しを目的とした関わりは、単に時間を消化し、全く生産的でない結果として終わることもある。したがって、指導においては、学生の出来ないことに目を向けるのではなく、まずは出来たことに着眼して関わっていくことが大切であると考えられる。それが、どういう状況下で出来たのか、その時はどういう気持ちであったのかなどのポジティブな面に焦点を絞った関わりである。これは、学生は今、青年期というまさに自分自身を発見しつつある段階にあり、これからそれを自らの力で見つけ出し得る存在であるという考えに基づいたものである。青年を意味する adolescence という言葉は「ラテン語の *adolescere* からきたことばであると言われ、to grow to maturity (成熟へ成長する) という意味を持っている²⁶⁾」という。今、問題を持っていてもそれが少しはうまくいくことや、うまくいきかけることもあるだろう。このことは既に看護学生自身が自分で問題を解決する力を持っているということになる。こうした学生に対する教員の働きかけは、単なる甘えや依存ではなく、学生自らが自己の肯定的な部分へ気付くことを助けることへつながると考える。

第3は、看護学生が問題解決に至る過程を

大切にするということである。看護学生があれこれ一見どうでもいいようなことで思い悩んでいる場合、看護教員は自分の経験から答えが分かっていることを理由に寄り道をさせず、まっすぐに答えに最短距離で近づけようとする人が多いのではないだろうか。「公的自己意識」が強く、人から認められたいという思いと、拒否されることに敏感に反応する両面をもった看護学生にとっては、紆余曲折し、失敗し、迷うということはできれば避けたいことであろう。しかし、この機会を捉え、この過程において時間をかけて考えるという経験を持つことが、事象をハウ・ツーではなく、多角的かつ柔軟な視点でもって分析、解釈することへとつながるのではないかと考える。確固たる自分自身を持っていないなかで、他者からの評価を気にする看護学生はゆとりがなく、焦っている。そして、失敗や迷いを契機に自己中心的な部分に隠された脆弱さが露呈する。教員が答えを急ぐことや、決め付けることで考えさせない状況を作ってしまうことの弊害は大きい。例えば、臨地実習における看護学生の抱える問題のひとつに患者とのコミュニケーションが挙げられる。トラベルビーは共感に関与した人々のあいだの、体験の類似性に基づいていると言う。多くは学生自身よりも倍以上の人生経験をもった対象に関わっていくのであるから、そこで看護学生が対象と自分との類似性を見い出せず困難に陥るということは当然のことであろう。自分が体験しない理解の範疇を超えるものに対しては、学生でなくとも十分に関われないからである。

しかし、「学生のもっている性質とか背景が、他人との共感を発達させる能力を決定付けている²⁷⁾」とするなら、そこに働きかけなければならぬ。トラベルビーは少なくとも学生がその人自身とは違う世界を覗けるように適切な文献を提示し、その読書で得られた理解と知識を実際の生活や援助で翻訳するところが教員の役割であると述べている。知識と技術の統合が看護ならば、また、看護はその技術を媒介にしてその人の全人格が相手に伝わるならば、単なる専門的知識だけでなく広く柔軟な視野が持てるような教養も一緒

に育んでいく必要があるという。または、共感を発達させるため学生と患者との類似性を意識的に探索させるようなロールプレイなどが効果的であるとも述べている。このロールプレイについては、他者の役割を演じることでより深く考えることが出来るし、また、考えようとする事ができる。臨地実習も最後の段階になると今まで関わってきた多くの患者を通しての学びから看護学生自らが看護教員の思いの範囲を超えて実に豊かに他者の理解を深めていくということも身をもって経験している。このように、学生が体験した何かの手がかりをもとに次の手がかりへとつなげていくことが大切である。

最後に、青年期における教師=生徒関係について先行研究では「青年が教師に求めている感情は親の感情に類似した『権威への依存』と同時に『権威への反発』²⁸⁾」であることが明らかされている。さらに、青年心理の特徴からは、青年期の課題として身体的、精神的、社会的な変化を受容して自己に統合していくことが挙げられる。そして、この精神的変化については、具体的にいえば親子分離と孤独がその中身になる。この分離は基礎に信頼関係がないと成り立たない。つまり、振り返った時にそこにいる人がいることが大切なのである。これらをふまえれば、看護学生が問題にぶつかった時、学生が自分の感情を素直に表出出来る関係を基礎に築く必要性を再認識するに至る。

以上は、看護教員なら当然とされるであろう。しかし、これらがどの程度実践できているのかを今一度厳しく自分自身に問い直す必要性を本研究結果から得ることが出来るのではないだろうか。他者に変容を求めるのならばまずは自分自身が変わっていくことが求められる。看護学生が看護の対象との関わりという臨床で自分自身を新たに発見していくことが出来るように、看護教員が看護学生との関わりという臨床のなかで互いの相互作用のもとに成長していく可能性を見失ってはならないのである。

・おわりに

本研究結果から明らかになったことを次に述べる。第1に、看護学生の「自尊感情」と「感情的共感性」には相関は認められないことである。しかし、この結果については、次の点を考慮する必要がある。「自尊感情」に関してはローゼンバーグ (Rosenberg, M.) のいう「自分を非常によい (very good)」と考えることと、「自分をこれでよい (good enough)」と考えることの2つの意味のうち後者を感じることを自尊感情とした場合であること。また、「共感」についても、他者の心情を感じ取る能力として情動反応面を強調した尺度を用いた場合であること。そして、対象も看護学生という限定されたものであることから普遍性については今後他の尺度等を用いて追試するなど検討していく必要がある。

第2に、看護学生の公的自己意識は賞賛獲得欲求および拒否回避欲求といった両極性の欲求が同時にあり、それらは強い関係にあること。

第3に、看護学生の感情的暖かさに公的自己意識の程度は影響しない。むしろ、公的自己意識が高いほど感情的暖かさに強く影響していることである。

これらは、青年期の心理である不安、自己中心性、感情の易変性と両価性といった特徴や常に多くのものから評価される立場である看護学生の特殊性から明らかになった。

最後に、看護学生の自己評価、自己意識の特性としては、自尊感情については、男子の方が女子よりも高かった。これは、公的自己意識が女子の方が男子よりも高いこととあわせて考えると、女子は自分の意識の形成を他者の眼差しであるといったように他者との関係においておこなう。しかし、男子は他者の目に対抗、または、平行する形で自分なりに自分を見ていくということがその理由の1つになりえると考えられる。

しかし、本研究でキーワードとなった「自尊感情」「共感性」についてはさまざまな定義やそのとらえ直しがされている。例えば、新たに自尊感情を関係性からとらえ直す提言もされている。看護はまさに人と人との関係

性のなかで営まれる。そして、それは他者との関係性においてのみ成り立つ。この観点から自尊感情と共感との関係も明らかにする必要が出てきた。

また、本研究で得た結果は看護学生のみを対象としており、比較対象となるものがないことから、得られた結果がどの程度看護学生としての特色を表せたのかについては明確には出来なかった。今度は、比較対象との関係の中でさらなる検討をしていく必要がある。

看護学生の共感性とそれに影響を及ぼすであろうと考えられた自己評価、自己意識については、全体としてのいくつかの傾向は示唆された。しかし、それぞれについては一人ひとりのなかでさらに複雑に絡み合い、自分を適切に評価し、受け入れることが出来る条件はまたさまざまである。以上のことから、さらに個別性を重視した具体的な関わりについて検討を重ねていきたいと考える。

付 記

本研究は、東洋大学文学部教育学科に提出した卒業論文(2000年度)を加筆修正したものです。

引用文献

- 1) 高橋照子 1991 シリーズ看護後の原点 人間科学としての看護学序説 看護への現象学的アプローチ 医学書院 p.189.
- 2) 白石裕子 1996 看護学生と教育系学生における共感性の比較 看護教育, 37(9), 734 - 735 .
- 3) 加藤隆正 1960 自己意識による適応の研究 心理学研究, 31, 53 - 63.
- 4) 押見輝男 1986 自己焦点注意とユーモア感知 立教大学心理学科研究年報, 21・22, 50 - 56.
- 5) 清水裕 1999 自尊感情の高さが援助と攻撃に及ぼす影響 昭和女子大大学生活心理研究所紀要, 2, 1 - 13.
- 6) 林智子 2002 看護学生の共感性と関連要因の検討 - 女子大生との比較から 看護教育, 43(7), 580 - 585 .
- 7) 同上
- 8) 堀洋道他(編) 1992 心理尺度ファイル 人間と社会を測る 垣内出版 p.68.
- 9) 押見輝男1992 セレクション社会心理学

- 2 自分を見つめる自分 自分フォーカスの社会心理学 サイエンス社 Pp.50 - 51.
- 10) 堀, 前掲, p.163.
- 11) 堀, 前掲, Pp.324 - 325.
- 12) 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 28(3), 150 - 167.
- 13) 梶田勲一 1988 自己意識の心理学東京大学出版会 p.92.
- 14) Mehrabian, A., Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. Journal of personality, 40, 525 - 543.
- 15) 山本真理子他 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64 - 63.
- 16) 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, 57(3), 134 - 140.
- 17) 同上
- 18) 服部祥子 1998 生涯人間発達学入門 人間への深い理解と愛情を持った看護者を育てるために 看護教育, 38(8), 594 - 645.
- 19) 同上
- 20) 仙崎武・吉田辰雄(編) 1980 青年心理学 過渡期の青年心理 福村出版 p.198.
- 21) 押見, 前掲, p.69.
- 22) 梶田, 前掲, p.86.
- 23) 同上, p.116.
- 24) 同上
- 25) J.トラベルビー(長谷川浩・藤枝知子訳) 1974 人間対人間の看護 医学書院 p.309.
- 26) 仙崎・吉田, 前掲, p.38.
- 27) J.トラベルビー, 前掲, p.310.
- 28) 仙崎・吉田, 前掲, p.208.

付 調査表

- 問1 現在、何歳ですか () 歳
 問2 あなたは男性ですか、女性ですか 1 男性、 2 女性
 問3 あなたは、何年生ですか 1 1年生、 2 2年生、 3 3年生
 問4 次の特徴のおのおのについて、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答え下さい。誰からどのように見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままに答えて、自分にあてはまるものを1つ選んで○で囲んで下さい。(1)～(10)の質問の全てに、1～5のいずれかをつけて下さい。

	あ て は ま る	や や あ て は ま る	ど ち ら ど も い え な い	や や あ て は ま ら な い	あ て は ま ら な い
(1) 少なくとも人並みには、価値のある人間である	5	4	3	2	1
(2) 色々な良い要素をもっている	5	4	3	2	1
(3) 敗北者だと思ふことがよくある	5	4	3	2	1
(4) 物事を人並みには、うまくやれる	5	4	3	2	1
(5) 自分には、自慢できるところがあまりない	5	4	3	2	1
(6) 自分に対して肯定的である	5	4	3	2	1
(7) だいたいにおいて、自分に満足している	5	4	3	2	1
(8) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	5	4	3	2	1
(9) 自分は全くだめな人間だと思ふことがある	5	4	3	2	1
(10) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	5	4	3	2	1

- 問5 あなたは日頃自分に対してどのようにお考えですか。以下の項目について、自分にあてはまるものを1つ選んで○で囲んで下さい。(1)～(12)の質問の全てに、1～5のいずれかをつけて下さい。

	あ て は ま る	や や あ て は ま る	ど ち ら ど も い え な い	や や あ て は ま ら な い	あ て は ま ら な い
(1) みんなの人気者になりたい	5	4	3	2	1
(2) みんなの注目を浴びたい	5	4	3	2	1
(3) 人前ではいつもかっこよくありたい	5	4	3	2	1
(4) 何か気のまいたことをいって人を感心させたい	5	4	3	2	1
(5) 人に自分を印象づけたい	5	4	3	2	1
(6) どんな時でも相手の機嫌をそこねたくない	5	4	3	2	1
(7) 誰からも嫌われたくない	5	4	3	2	1
(8) みんなから“変な人”だと思われたくない	5	4	3	2	1
(9) できるだけ紙は作りたくない	5	4	3	2	1
(10) 人がたくさんいると神経質になる	5	4	3	2	1
(11) 人と意見が対立しても気にならない	5	4	3	2	1
(12) 何か問題にぶつかったときは、自分の心の動きに気をくばる	5	4	3	2	1

(13) 自分の本当の気持ちに注意が向きやすいたちである	5	4	3	2	1
(14) でかける前には必ず身だしなみをたしかめる	5	4	3	2	1
(15) 自分を反省してることが多い	5	4	3	2	1
(16) 写真を撮られる時はよく写ろうとする	5	4	3	2	1
(17) 自分のふるまいが場違いでないかと気になることがある	5	4	3	2	1
(18) 痛みに敏感な方である	5	4	3	2	1
(19) ちょっとしたことでも、すぐどぎまぎする	5	4	3	2	1
(20) 自分がこういう人間であればなあと、空想することが、ときどきある	5	4	3	2	1
(21) 初対面の人でも平気で話ができる	5	4	3	2	1
(22) どうやって自分の気持ちを相手に示そうかと気になることがある	5	4	3	2	1
(23) 自分がいくぶん距離を持って自分自身を見つめている感じを持つことがある	5	4	3	2	1
(24) 何かする時は人の目を考慮する	5	4	3	2	1
(25) あまり自分ということを意識しないたちである	5	4	3	2	1
(26) 人が自分のことをどう思っているか気になる	5	4	3	2	1
(27) 自分の気持ちの変化に敏感である	5	4	3	2	1
(28) 人と目が合うと自分のほうから視線をそらしてしまう	5	4	3	2	1
(29) はじめての場面では、うちとけるまでに時間がかかる	5	4	3	2	1
(30) 自分の能力について考えることが多い	5	4	3	2	1
(31) 自分はあの時、なぜそのようにふるまったのかと考えてしまうたちである	5	4	3	2	1
(32) 自分を相手に見せるような時は注意深くなる	5	4	3	2	1
(33) 自分の行為や考えに矛盾がないか、いつも反省する	5	4	3	2	1
(34) いつも自分の容姿に気をくばっている	5	4	3	2	1
(35) 人前で話す時は不安感をおぼえる	5	4	3	2	1
(36) 人に見られていると学習や実習がうまくできなくなる	5	4	3	2	1
(37) 自分自身についてはあれこれ考えない	5	4	3	2	1
(38) 人により印象を与えようといつも気をつかう	5	4	3	2	1
(39) 自分がどんな人間であるのか、いつも理解しようと務めている	5	4	3	2	1

問6 次にいくつかの短文が書いてあります。それぞれの短文を読んで、あなた自身がどの程度そうだと思うかを判断してください。自分にあてはまるものを1つ選んで○で囲んで下さい。(1)～(25)の質問の全てに、1～5のいずれかを付けて下さい。

	あ	やや	どちらとも	やや	あて
	て	あ	い	あ	は
	は	て	え	て	ま
	ま	は	い	ま	ら
	る	ま	ない	ら	ない
(1) 私は映画を見る時、つい熱中してしまう	5	4	3	2	1
(2) 私は感情的にまわりの人から影響を受けやすい	5	4	3	2	1
(3) 私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くとおかしくなることもある	5	4	3	2	1

(4) 私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない	5・・4・・・3・・2・・・1
(5) まわりの人が神経質になると、私も神経質になる	5・・4・・・3・・2・・・1
(6) 歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる	5・・4・・・3・・2・・・1
(7) 私はまわりが興奮していても、平静でいられる	5・・4・・・3・・2・・・1
(8) 小さい子供はよく泣くが、かわいい	5・・4・・・3・・2・・・1
(9) 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いなや気分になる	5・・4・・・3・・2・・・1
(10) 私は他人の感情に左右されずに決断することが出来る	5・・4・・・3・・2・・・1
(11) 私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ	5・・4・・・3・・2・・・1
(12) 私は友人が悩み事を話し始めると、話をそらしたくなる	5・・4・・・3・・2・・・1
(13) 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい	5・・4・・・3・・2・・・1
(14) 私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる	5・・4・・・3・・2・・・1
(15) 私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそられない	5・・4・・・3・・2・・・1
(16) 私は人がうれしくて泣いているのを見ると、しらけた気持ちになる	5・・4・・・3・・2・・・1
(17) 私は会計事務所に勤務するよりも社会福祉の仕事をする方がよい	5・・4・・・3・・2・・・1
(18) 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる	5・・4・・・3・・2・・・1
(19) 私は悪い知らせを人に告げに行く時には、こころが動揺してしまう	5・・4・・・3・・2・・・1
(20) 私は贈り物をした相手の喜ぶ様子を見るのが好きだ	5・・4・・・3・・2・・・1
(21) 人前もはばからず愛情が表現されるのを見ると私は不快になる	5・・4・・・3・・2・・・1
(22) 私は身寄りのない老人を見るとかわいそうになる	5・・4・・・3・・2・・・1
(23) 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる	5・・4・・・3・・2・・・1
(24) 私は友人が動揺していても、自分までが動揺してしまうことはない	5・・4・・・3・・2・・・1
(25) 私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる	5・・4・・・3・・2・・・1

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。